現代の民話

戦争ってなあに

火の壁(かべ)をくぐったヤギ

岩崎京子 文 ■ 田代三善 絵

NDC 913

岩崎京子
火の壁をくぐったヤギ
国土社 1985
110p 22cm （現代の民話・戦争ってなあに 3）

現代の民話・戦争ってなあに——3

火の壁をくぐったヤギ

岩崎京子・文 田代三善・絵

1985年2月25日 初版印刷
1985年3月5日 初版発行

■発行所 株式会社国土社
〒112 東京都文京区目白台1—17—6

■発行者 長宗泰造
電話 03(943)3721(代)
振替 東京6—90631

©1985 Kyoko Iwasaki & Sanzen Tashiro

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

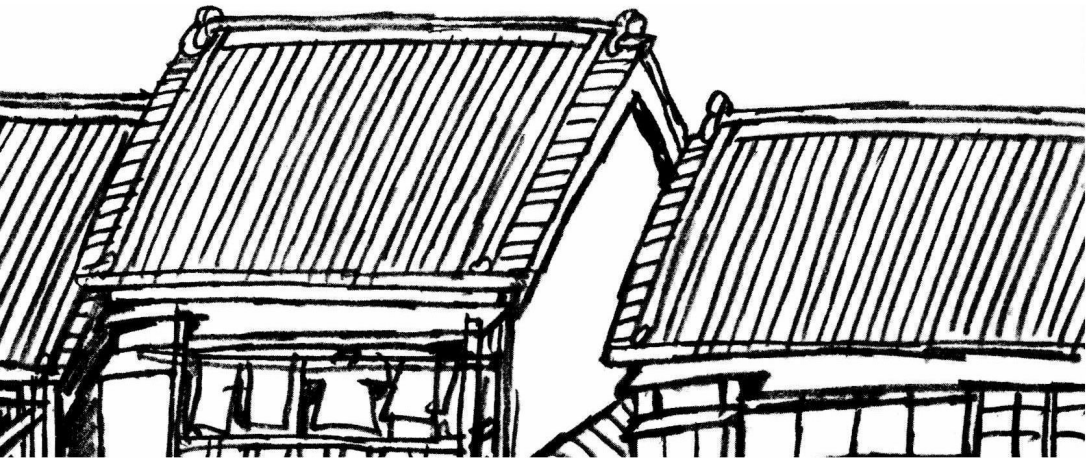
ISBN4-337-07103-2 C8391

火の壁（かべ）をくぐったヤギ

岩崎京子 文　田代三善 絵

もくじ

火の壁をくぐったヤギ　5
コックリさま　21
赤紙　35
防空壕　47
赤ずきんちゃん　61



密告(みつこく) 75

風船爆弾(ふうせんばくだん) 91

https://www.[illegible]塾PDF [illegible]

装丁　小川公男

火の壁（かべ）をくぐったヤギ

防空演習のまっさいちゅう、おっかさんのおなかがいたくなってさ、みんなにかかえられて病院にいった。班長てえのがこちこちでね、ゆうずうがきかないんだよ。ぶつぶついったんだとさ。こんときばっかしは、女連にくってかかられ、だまっちまったって。

そんとき生まれたのが、イチロウだよ。おまえたちのおとうちゃんさ。ちいちゃくってね。おまけにお乳もたりないんで、一日びいびいなきどおし。それがかすれたような声になり、しまいにはその声もでやしなかった。

*ゆきひらに一合の水と、米をほんのすこしぱらぱらっといれて、火ばちにかけておも湯をつくるんだけど、うすいもんで腹もちもわるくてさ。イチロウはいっときはだまっても、すぐまたびいびいないたっけ。

ある日おとっつぁんは、徴用工仲間の加藤さんから、ヤギをかりてきた

*ゆきひら＝陶製のなべ

んだよ。そうそ、おとっつぁんは洋品店の番頭だったけど、そのころ軍需工場にいかされてた。加藤さんてえのは、酒屋のだんなだった。

「ヤギは草だけたべさせればいいし、おとなしい動物だから、子どもにも世話できる。スミコ、おまえが草をとってきて、やれ。」

そんなことといわれたって、あたしゃこわくてそばにもよれやしないよ。金色の目と、四角い瞳孔がきみわるかった。草かりだってたいへんさ。いくらその時分だって、町場に、やたらに草なんてありゃしないもの。ずいぶん遠くまでいくんだよ。晴れた日はまだいいさ。雨なんかふってごらんよ。手も足もつべたくって、なきたくなった。

「そんなら、川っぷちにヤギをつれてけ。」

それだって、たいへんさ。ヤギはいつもつながれっぱなしだから、外に

でるとはしゃぐのさ。イヌとおんなじ。きゅうに走りだして、ころばされたり、とつぜんうしろにまわって、つきたおすんだもの。何度なかされたか。いつかなんかおとなしいとおもや、よそさまのかきねに首つっこんで植木、ぼうずにしたんだよ。

乳しぼるのは、夕方帰ってからのおとっつぁんの仕事だが、なれるまで苦労してた。

ヤギのお乳はくさいんだよ。一度にたててにおいをとばすんだけど、それでもイチロウはいやがって、のまなかった。むりにのますとげりなんかしてさ。でも、そのうちなれてすこしずつイチロウの体重がふえだして、うちじゅうほっとしたもんさ。

ある晩、おとっつぁんはいった。

「そろそろ、ヤギをかえさんとな。そうそう好意にあまえてもいられん。」

それを寝床できいてさ、あたしはびっくりしちまった。そのころあたしも、どうやらヤギになれて、世話するというより、遊び相手にしてたんだもの。仲のよかったブルキ屋のセッちゃんも、となりのおケイちゃんも疎開しちまってねえ。

あたしはふとんにもぐって、声が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もれないようにしてないたっけ。つぎの朝、すまして茶の間にでてったら、おっかさんがあたしの顔見てわらうのさ。

「おや、スミコ、なんだね、その顔は……」

目がふくれあがり、いっぺんでないたのがばれちまった。

「ヤギはおかえししないわけにはいかないよ。イチロウもふつうのごはんたべるようになったしさ。わかるだろう、スミコ。」

けれども、ヤギはそのまんまかりておいていいことになった。加藤さんが出征されることになったんだよ。徴用工は兵隊にいかなくてもいいそうだなんて、おとっつぁんたちは安心していたんだけどさ、だんだんそうはいかなくなっちまったのさ。

加藤さんとこじゃ、みんないなかにひっこすことになってね、ぎゃくに

ヤギは、

「そのまま、そちらさんであずかって……」

って、たのまれちまったんだよ。

ところがさ、世の中うまくいかないもんだね。とんでもない命令が、軍からでた。

「イヌ、ネコは処分しろ。もし東京が空襲になると、火を見て、動物はあばれる。」

ずいぶんらんぼうなはなしじゃないか。むだめしをくうイヌやネコは殺せてえのが、ほんねだったというからねえ。

すると、おっかけて今度はニワトリ、アヒル、ヤギを飼ってはいけないと、いってきた。

「あれ、ニワトリやヤギは役にたつだろ。」
「そのためのえさはどうする？　人間がたべれば戦力になるっていうんだとよ。」
そんなところまでおいつめられてたんだねえ。
「よしっ、かくして飼おうや。」
おとっつぁんがいった。
「こいつは加藤さんのヤギだ。あずかりもんを処分するわけにはいかん。よし、四じょう半のたたみをあげて、床板をぬいて土間にして飼えばいい。休みにやってやる。」
つぎつぎいろいろおこるもんだねえ。そういってたおとっつぁんのとこに、召集令状がきちまった。

「いずれはくる運命さ。おせえくらいだ。肩身がせまかったもんなあ。」

強がりだよ。昭和二十年三月だったから、戦況もわるくてさ。そんなときに戦争にかりだされるのは、死ににいくようなもんさ。でも子どものあたしゃ、おとっつぁんがヤギのいるとこさえるやくそくをはたさずいっちまうのはずるいなんて、おもったもんさ。

おとっつぁんの出征していった三日あと、つまり三月の十日さ、東京は大空襲をうけた。

あれは、ま夜中ごろだったろうかね。あたしたちはウドン屋のほった、すこしばかり大きい防空壕にいれてもらった。B29の地鳴りのような爆音がしてくる。かなり低いし、一機や二機じゃなさそうだった。ざあっと夕立ちみたいな音もする。それが焼夷弾のおちてくる音だったんだけどさ。

とつぜん、だだぁんと地ひびきがした。防空壕の壁の土がざざっとおちた。爆弾だろうか。けんとうつかないけど、近いらしい。みんなきゅうに不安になった。

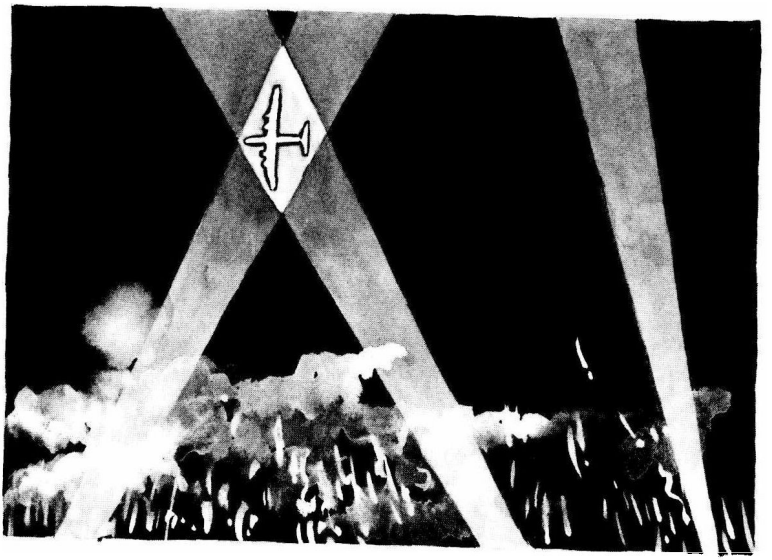
そこへ、「小学校へ避難してくださーい。壕にいてはきけんです」という、警防団の声がした。

「ヨシコ、でよう。スミコちゃんたちもにげたほうがいいよ。」

うどん屋のミツコねえちゃんがいった。あわててでてみると、どこかに火の手があがっているらしく、空が明るくってさ、けむりのにおいもするようだ。

「スミコ、ぼやぼやしないで。こっちだよ。」

おばちゃんが、あたしの手をひっぱった。



「わかってるよう」といおうとおもっても、声がでなかった。そのころこのおばちゃんは、まだお嫁にいかないで、うちにいた。おとっつぁんの妹さ。ほら、市川（千葉県）のおばちゃんだよ。

焼夷弾てえのはたばになっていて、それが空中でぱっと散り、ばらばらおちてくるんだ。前をいくおじさんのレインコートに黒い油がかかり、それがぼっともえだすじゃないか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com